

あ の 時 き、「マ ス コ ミ は 強 か っ た」、「労 組 も 強 か っ た」、「闘 い が あ っ た」

こ れ か ら も 応 援 し ま す

川田龍平 様

私は1982年から2001年まで製薬企業で勤務していましたので、薬害エイズ事案の一連の経緯は知っています。一部の方は面識もありました。

当時の国の踏み込んだ対応には、驚きました。

あの時、「国の対応をどういう気持ちで聞きましたか」、「これからどうしようと考えましたか」。

私は当日体調をくずして赤坂にいけなかったのですが、私がしたかった質問を会場の方がされました。

先生は「“おわび”は“遺憾”から前進したが、“謝罪”には届かなかった」、「国が罪を認めるのは難しいだろうと考えた」というお話をされていました。

ここまでは“想定内”でした。

印象に深かったのは「薬害エイズの報道はマスコミが強かった」、「労組も強かった」、「闘いがあった」というお話です。なるほど、と。今の日本の新聞やTVが凋落しているというご意見に、私は賛成です。

先生ご自身が国会議員になられ、政治家や官僚の立場も慮っていらっしゃる。

一方で、国会議員としてマスコミの凋落やショック・ドクトリンの無責任さを嘆いていらっしゃる。国会運営のあり方にも、一過言ありとお見受けしました。

薬害エイズ訴訟を闘ってきた先生の当時の苦痛は、「ある情報(資料)が出てこない」ことだったのではないかと推察しています。新型コロナワクチン副反応の救済(認定)の問題も、森友問題なども同じ構造です。行政の無謬性と政治家の使命をどうバランスさせるかは、そういうご経験を“義”として立たれた政治家の国民に対する役割と思います。「ある情報は出して下さい」と。

僭越ながら、先生への期待が伝わればありがたく、これからも応援させていただきます。

本日また一つ、貴重な経験を得ることができました。これを糧にして、ジャーナリストとして今の空気に「一石」投げこんでいきたいと思えます。本日は本当にありがとうございました。

中島 薫 (なかじま かおる)

国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 修士課程
医療福祉ジャーナリズム分野 M1